

報告：第3回座談会 みんなで語ろう！大学での子育て
コーディネーター：生駒夏美
国際基督教大学

今年で3回目となる座談会だが、今回も多くの参加者を得て活発な討論が交わされた。ご参加くださった皆様に感謝したい。今回、特に 이슈となったのは留学生の子育て事情であり、さらにそこから浮かび上がるさらなる大学での育児支援の必要性であった。特に保育支援者をどうするのかということは、授乳室開設のときから課題としてくすぶっていたことだったが、今回それが大きくクローズアップされることとなった。

きっかけは昨年末の留学生アンさんからの支援要請だった。アンさんはJDSプログラム（人材育成支援）でベトナムから派遣されている。12月中は夫が日本に来てくれたので子育てを任せることができたのだが、1月になると夫が帰国してしまうし、保育園にも入れられない。どうしたらよいかという相談だった。ジェンダー研究センターでは授乳室への登録を勧め、さらに保育支援NPOと保育ボランティアの学生を紹介した。アンさんは早速授乳室に登録し、さらにNPOにも連絡をとったが、残念ながら当該NPOでは支援希望者の増加によって、一時受け入れを停止しているとのことであった。留学生なので一般のベビーシッターを雇うことは金銭的に難しい。そこで学生ボランティアによる支援でなんとかやっつけようということとなった。しかし1月になるとすぐにこの支援体制は無理があることが判明した。アンさんは多くの授業を履修しており、ほぼ毎日数コマの授業に出席しなければならない。だが保育ボランティアの学生たちもまた授業に出席しなければならない、到底カバーしきれない時間量ではなかったのだ。結局、困ったアンさんが本国から母親を呼び寄せることとなった。しかし母親のビザは3ヶ月しか有効でなく、延長しても6ヶ月とのことで根本的な解決にはならない。また春からの保育園入園を目指して申請をしたが、三鷹市の保育園事情は非常に悪い。学生であるアンさんのポイントは低く、入園の見込みは低いと言わざるをえない。こういった状況の中、今回の座談会を迎えたのである。

前回の座談会の折には、開設された授乳室でいかに多くの人助けられてい

るかというポジティブな面が出てきたのだが、今回はいかに授乳室だけでは育児支援として不十分であるかが明らかになった。特に子育て中の留学生の多くは、たった一人で日本に来て、右も左もわからない状況で困り果てている。ICUの授乳室は、保育者を自分で手配できることを前提としているようだが、そこからはこのような留学によるシングルマザーは抜け落ちてしまうのである。これまでの授乳室利用者の中にも留学生がいたが、彼女の場合は夫も学生で保育者として育児を手伝える状況であった。これは例外的なことと言えるだろう。

今回特に感じたことは、大学における留学生受け入れ態勢に、アンさんのようなケースが織り込まれていないという点である。これは授乳室開設を求めるときに感じたこととも共通している。つまり大学側が想定する「学生」や「留学生」には、妊娠したり出産したり子育てしたりする女性の身体が含まれていないのである。学生であっても、大学院生であっても、留学生であっても、妊娠し出産したり子育てしたり介護したりする可能性はあるのだが、これまでそのような可能性が認識されておらず、従ってそういう状況に置かれた学生や留学生が相談できる窓口が存在しなかったことは問題であろう。これまでのケースではジェンダー研究センターがその窓口の代理のような役割を果たしてきたが、本来は一研究所ではなく、大学側にそのような窓口があるべきである。アンさんの場合はさらに大学院の留学生担当者の方も個人的に支援してくださっていたが、これも個人が負担する業務内容ではないだろう。

当初提示された授乳室使用ルールや授乳室広報体制（の不備）にも表れていたのは、利用者は当然教職員という大学側の想定である。しかしこれまでの授乳室の頻回利用者は、教員1、学部生2、大学院生（留学生）2となっている。つまり授乳室は福利厚生施設として必要なだけでなく、学生サービスとして必要とされていることが明らかなのである。おそらく学生として想定されているのは18歳から22歳くらいの未婚者なのだろう。そして、そのような学生が妊娠・出産をすることを「問題」としてとらえる視点がそこには存在するよう思う。しかしICUの学生は実はもっと多様である。一度就職してから社会人入学してくる学生も増えているし、留学生も多い。「学生」をやるということが、子育て以前にあるべきであるという価値観を持たない学生もいるのである。

ましてICUは今後海外により開かれた大学を目指していく方針であり、大学院にも多くの留学生を受けていれていくことを目指している。日本でこそ学部卒業直後に大学院進学をする人が多いが、これは国際的に見れば決して当たり前のことではない。むしろ一度社会に出て実務経験を積んでから学業に戻るケースの方が多くのではないだろうか。そうなるとますます妊娠・出産を考える時期と、勉学の時期は重なってくるのである。言うまでもないことだが、留学生は男性とは限らない。今後ミッドキャリアの女性たちがますます多く留学してくるかもしれないのである。今回のアンさんはJDSプログラム奨学生だが、こういった海外のキャリア組がさらなる知識を求めて留学してくるケースでも、妊娠・出産・育児の時期と留学は容易に重なるのである。

従って、大学に求められていることは、学生や留学生が妊娠・出産・子育てする可能性を十分に持つことを前提とした受け入れ態勢を整えることである。学内保育施設を持つ大学が増えつつある昨今、優れた教職員をICUに雇用するためには保育施設の開設は急務である。しかし教職員だけでなく、学生・留学生の誘致のためにも学内保育施設は必須なのではないだろうか。二木泉さんも今回書いておられるように、子どもを持つ女性にとって、保育態勢が整っている環境ならば博士後期課程への進学も可能となるが、そうでない場合は極めて難しい。ジェンダー・ギャップ指数の世界順位が106位という日本の恥ずべき現状を変えるためにも、女性のキャリア支援は真剣に取り組まなければならないし、その際には育児支援は必ずセットで考えなければならない。

今回のアンさんのケースでも結局はアンさんが自費で母親を本国から呼び寄せ、保育を担当してもらうようアレンジしなければならなかった。奨学団体側にも、大学側にも、ましてや日本社会にも受け入れ態勢がなく、つまりは「自己責任」にされてしまったのである。今回参加してくれた学生の一人も、妊娠した時に、休学しないで学業を継続する方法を相談しにいったところ、窓口で「休学してください」と告げられたという。解決策を模索することすらなく、面倒なことは女性の「自己責任」にしてしまう組織というのは、その組織の男性中心性を露呈している。せめて、それぞれ個人のライフスタイルを尊重し、「休学したくない」という事情に寄り添った相談をしてもらいたかったと思う。

これらの事象は日本社会のあり方と軌を一にしている。つまり妊娠・出産は

女性の個人的な行為であり、自己責任で処理しなさいという方針である。しかしこういったあり方は近年の少子化や育児ストレスを抱える母親の増加など様々な社会問題を引き起こしており、近年批判が高まっている。そもそも育児や介護などを家庭という私的領域に押し付けることによって、社会は結局は女性にその役割を押しつけ、女性の社会進出を妨げてきた。グローバルスタンダードを標榜するICUは、率先してこの状況を変えるべく行動すべきである。そのためにも、学内での女性キャリア支援/育児支援にもっと真剣に取り組んでもらいたいし、CGSはその実現のためにより具体的に大学側に要望していると考えている。座談会参加者のうち3名の方にご意見をまとめていただいたものを以下の頁に掲載する。その他、当日出た意見のいくつかをここにご紹介したい。

- ・産前産後の経済的困難を大学側はもっと認識してもらいたい。奨学金も使えない状況となるので、産休（学費納入が免除された休学）システムの導入を考えてほしい。
- ・大学内に子育て相談窓口がない。
- ・海外からの留学生には様々なケースがあり、母親が留学生の場合や、父親が留学生で家族を同伴する場合もあるが、どちらにしても子どもの保育や就学に関して支援が必要であるが、その窓口が存在しない。
- ・奨学生受け入れに際して、留学期間中は出産しないことを条件としている大学もあるというが、これは極めて非人道的かつ女性差別的である。特にODAを財源とした奨学金の場合、将来その国の中枢を担う人材が日本に送り込まれてくる。その受け入れ態勢が現状のようなものでよいものか。将来の日本とその国との関係性にも響くこととなるのではないか。
- ・留学生にせよ、国内からの学生にせよ、妊娠し出産する身体を持っている人間であることを大学側はもっと認識すべきではないか。大企業だけでなく大学も、男性をモデルとしているのではないか。
- ・タイの大学院やカナダの大学院など、子育てサポートが完備された大学院も増えつつある。ICUは世界で今後競合していくのであれば、もっと整えて行かなければならない。

- ・三鷹市が企業内保育施設への支援をしており、ICUも利用できるのではない
か。
- ・認証や無認可など、託児所の運営形態には様々あるが、学生や留学生も利用
できるものとする必要がある。
- ・外部の利用者にもオープンし、学内利用者や学生利用者とは料金体制を変え
るなどして運営可能なのではないか。具体的な提案を今後考えたい。
- ・せっかくICUという環境にあるのだから、多文化、多言語の保育を実現して
もらいたい。
- ・学生ボランティアの保育グループを、もう少し組織化できないか。ボラン
ティア人数が増えれば各人の負担も減ることになる。保育施設ができれば、
そこでもボランティアを活用できるのではないか。
- ・アメリカの大学付設の保育所で、利用者が週に2時間奉仕するとコオペラ
ティブ方式を採用している例がある。そのようなものを採用するのはどう
か。それぞれの文化の紹介をしたり、絵本を読み聞かせしたり、あるいは学
生ボランティアが参加して音楽や劇などの企画をしたりすると面白いもの
になる。

これらの意見を受けて、CGSでは今後より具体的に大学側にさらなる育児支
援の必要性を訴えていきたいと考えている。引き続きご支援をお願いしたい。
またご意見、ご提案、ご要望等をお持ちの方はぜひCGSにお寄せいただきたい。